



第16回 木村奈保子の 音のまにまに

今回は、年末恒例、日本の音楽番組と、新年恒例のウィーン・フィル・ニューイヤー・コンサートを対比させた。マリス・ヤンソンス氏による指揮、そしてそこから生み出される音楽、演出はとても素晴らしいものだった。

求めるのは“リスペクト”する文化

昨年末の国民的歌唱番組の視聴率が最低か、なるニュースがあった。それでも、40%近くの人々が見たのだから、驚くべきテレビなのだ。ネームバリューのある歌手、ミュージシャンが集う華やかなショーに違いはないが、いつにも増してセンスの良い「演出」とはとても思えない。

ベテラン女性演歌歌手の後ろで踊るアイドルたちの図は異質な上に、きれいどころを集めた「喜び組」みたいな空気を醸し出して、女性に受けけないのも当然だ。バラエティー・ノリの演出で、音楽は見事にかき消されていく。老若男女、ヘタVSウマ歌手らのコラボレーションは、混ざり合わない絵の具のよう。こんなに混ざり合わないなら、いっそアイドル系だけではじけまくったらどうなのか、と思えるほど。リスペクトが足りないと感じさせるのは出演者ではなく、「演出」の問題だろう。

ともかく、アイドルを“音楽ビジネス”として生み出すことに最も力を入れる日本文化の未熟さには、閉口する。誤解されないためにいうと、出演者に罪はない。アイドルの一人ひとりの音楽性を成長させずに、大量生産と消費だけをするビジネス形態が問題なのだ。しっかり歌えるアイドルもいるはずだが、そんな能力を披露することは要求されていない。歌を聞かせるベテランたちも、かくして音楽ビジネスの波に追いやられていくのだろうか。



(C) Terry Linke

一方、ニューイヤーといえば、ウィーン・フィルのコンサート。今年ワルター・アウアー氏の出番ではなかったことだけ残念だったが、マリス・ヤンソンス氏による指揮は、さすがにバランス良く円熟味があり見事なものだった。昨年お会いしたロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団のフルート奏者、ケルステン・マッコール氏が、楽団を去ったばかりの常任指揮者、ヤンソンス氏についてかなり喪失感を抱いていたことを語っていたが、その意味がよくわかる。

ウィーン・フィルのニューイヤー・コンサートで指揮をするのは10年ぶり。その素晴らしい指揮もさることながら、演奏中、映像的演出として登場した、美しくエレガントな宮廷ファッションのダンサーたちの優美なダンスシーンは印象的だった。

クラシックだけが高尚だなどと私は思わない。それどころかジャズ、ソウル、歌謡曲などのほうが私の生活に根付いている。ただ、良い音楽、良い演奏、良い歌が好きなのだ。そして洗練された舞台を見たい。

芸能番組と音楽番組の溝は深まるばかり。企画者や演出家が音楽、アーティストをリスペクトしないことには、文化水準は上がらないだろう。



NAHOK INFORMATION www.nahok.com

NAHOKの商品情報は上記のNAHOK Webサイトをチェック!

Fabric from
Germany,
Made in Japan



NAHOKフルートケースは、防水機能にすぐれています。



こちらは高木ブー氏も愛用のウクレレケース。